

地方に呼び寄する原因が、歐米と亞細亞の東部南部とにては、全く相異なるに在るのである、亞細亞に於ては、農業が主であるから、農業の盛なる地には田舎人口が集合するのである、それから、生活の程度も、亦一原因であらう其の程度が低ければ、一定の區域内に、それだけ、多数の人が住める譯である。

歐米人の生活の程度は、遙に亞細亞人の上に在る、蓋し其の甚だ高いのは、アングロサクソン人種で、殊に、殖民地に移住したアングロサクソン人である、生活の程度が、高ければ、高い程それだけ贅澤品の需用が多くなる理である、多くなれば、之を供給する都會人の數が、増して来る理である人口の増加に於て世界第一等に位するものは、蓋し合衆國である、此の國は、千七百九十年には、人口僅に四百萬と注せられたのであるが、百十年の後の九百年(明治三十三年)には、七千六百萬となり、昨年末には、殆ど八千萬とな

つたのである、して其の増加の仕方は、かうである、最初の四十年間には、田舎人口が、市街人口より、一層早く増加したのである、それから、鐵道が開けたり、大工業が起つたりして來てからは、反對の現象を出現して、大西洋沿岸の北部諸洲に於ては、大市街(人口十萬以上)に住む人口の百分比例は、英國の如き、歐洲第一の市街人口の多い國より、一層大である、即ち前者は、五十、後者は、三十五である、又二萬以上の市街人口の比例も、英國より少しく小なるのみである、即ち前者にては、五十三、後者にては、五十八である、是に因て觀るときは、米國に住むアングロサクソン人は、歐洲に住むものより、一層市街住居に傾くものと云つて、可なりである。

合衆國中部の諸洲は、大西洋沿岸の北部諸洲よりも、土地こそ豊饒なれ、人口は、反て遙に稀疎であるが、二萬以上の人口を有する市街人口の比例(二十八)は、佛蘭西の如き、古い文明國で、而も工業も可なり盛で、人口稠密

の度も、三倍する國の比例（二十四）よりも、一層大である。南方に至れば、事態が大に違つて居る、ウヰルジャ、ケンタツキー、ミズーリー以南、メキシコ灣沿岸までの諸洲に於ては、二萬以上の市街人口の比例は、僅に十であるが、此等諸洲中、ケンタツキー、ミズーリーの二洲は稍々北方の状態を有するを以て、之を計算外に置くときは、比例は、遙に下つて二萬以上の市人口は、七四となり、十萬以上の市人口は、僅々二となるものである、これは、大西洋沿岸の北部諸洲と、著るしい違ひて、中部諸洲に比ぶるも、尙大差違である、是に因て、南方の人口は、北方に比ぶれば、遙に田舎に集つて居ることが分る。

西の方、小麥産出の諸洲に至れば稍々北方の状態に近い状態が現はれて居る、即ちウヰスコンシン、ミネソタ、南北兩ダコタ、アイオワ、カンサス及びネブラスカ七洲に於ては、人口甚だ疎なるに拘らず、市街人口の比例は、殆ど

十四である、太平洋沿岸に至ると、又北方の状態に變じて居る、即ち其の二萬以上の市人口の比例は、三十五で、白耳義の如き、古い工業國（三十一）の上に出て居る、濠洲に至つては、比例は、一層大となつて、四十一である、して其の大部分は、四大市街に集合して居るのであるから、土地の爲には、反つて憂ふべき現象である。

近來、切りに、移住民を吸収しつゝある、亞爾然丁及び烏爾圭の二共和國に於ても、主市に住むものゝ、百分比は、頗る大であるが、尙濠洲にも及ばないのである、此の二國でも、濠洲の四洲（クヰースランド、新南威爾斯、ウヰクトリア、南濠斯良利亞）の如く、其の主府が、商業最盛の地なるのみならず、又殆ど唯一の工業地である、故に、此等の地にては、其の主府の大切なることは、巴里府の佛國に、倫敦府の英國に於けるよりは、一層甚しいのである、蓋し、頭が胴に對して、不似合に大であると、云はなければなら

ぬ。
 是から、更に、市街地と田舎地、即ち都と鄙との關係に就て、述べて見やう
 今を去ること數千年の昔から、つい十九世紀始まで、所によりては、其中頃
 までも、都人の食料品は、主として、其の都市の四近から供給したものであ
 るから、都と其の附近の鄙との間には、一種の密接なる關係を生じたのであ
 る、太古に於ける、メソポタミヤの大市や、フアラロ時代の埃及の都市と
 ても、矢張、同じ状態を呈したのである、古い記録に、昔し印度錫蘭島のアナ
 ラドハブラと云ふ北都と、ボラナヌアと云ふ南都との結構壯麗であつたこと
 が、載せてあるのみならず、水田に、水を供給する爲に、宏大なる瀦水池を
 拵へて旱魃時の用に供したことも、擧げてある、此の兩都の墟址や池の跡も
 尙今日まで存して、旅客の目を驚かすものになつて居る、乃ち是に因て、當
 時に於ても、都鄙相互の關係が甚だ密なりしことが、分かる譯である、尤も

此の關係の疎なりし、除外例も、ないでもない、然し其の敷は、甚だ少ない
 のである。

- 一、昔し、希臘の諸市が、其の食料とした穀物を、ポンタス地方の、希臘殖
 民地から、輸入したること
- 二、昔し、羅馬が、其の食料品を、シ、リー島、埃及、及び亞弗利加北岸の
 地から輸入したること
- 三、支那の北京が、遠距離に在る南方平野の諸省より、大運河を経て、米を
 輸入したること

今日では、食糧を取扱ふ商賣が、大に整頓して、運賃も甚だ低廉になつたの
 であるから、附近に、食料を産出する土地がなくても、市街や工業地は、故
 障なく發育することが、出来るやうになつて、來たのである、第四表は、各
 國食料品の、輸出入を掲げたもので、數字は、人口一人に對する價額である、

但し、一人壹圓以下の種類のもの（露國を除き）は、省いてあるし、又日、清、印、澳の如き、食料品の貿易の、割合に少い國、又は統計不備の國も、省いてあるのである。

第 四 表

一人に對する輸出入の價額(圓) \times 輸入 Δ 輸出

國名	穀類	果物	肉類	バター、チーズ	鶏卵	魚類
大英	\times 一六・五	\times 三・〇	\times 二・八	\times 六・五	\times 一・六	
白耳	\times 一八・七		\times 二・五	\times 一・五		
和蘭	\times 三〇・八			Δ 一七・八		
獨逸	\times 四・七	\times 一・六	\times 一・五		\times 一・〇	
佛良	\times 一・五					
瑞西	\times 一・九		\times 一〇・五	Δ 五・〇	\times 一・六	
丁抹	\times 一四・三		Δ 二六・八	Δ 三三・一	Δ 六・〇	Δ 二・三
諾威	\times 一四・一	?				?

瑞典	\times 五・一			Δ 三・九		Δ 一・五
西班牙		Δ 三・六				
伊太利	\times 二・二	Δ 二・一			Δ 二・三	
希臘	\times 六・〇	Δ 五・七				
希臘	Δ 二・三・八					
希臘	Δ 二・六	Δ 五・三				
希臘	Δ 二・六					
希臘	Δ 一・五・四					
希臘	Δ 四・一			Δ 〇・三	Δ 〇・五	
希臘	\times 一〇・六			Δ 三・七		
希臘	\times 九・七					
希臘	Δ 九・〇					
希臘	Δ 五・〇					
希臘	Δ 一・七					
希臘	Δ 八・九		Δ 三・七	Δ 四・一		

ニウジーランド	△五六	—	△三七〇	△一七	—
トランスワール	×一四〇	—	—	—	—
ニウファンドランド	×一二・五	—	—	—	△六二・九
加 奈 陀	△七・五	—	△九・五	△二一〇	△三〇
合 衆 國	△四〇	—	△五・九	—	—
亞 爾 然 丁	△三五・九	—	△一〇・五	—	—
キ ウ バ	—	△四・二	—	—	—
ジヤメイカ	×四・四	△八・八	—	—	—
コスタリカ	×二・二	△二二・二	—	—	—

右の表にて、一寸吾々の奇態に思ふのは、露國や、合衆國の様な、世界有数の穀物産出國の、人口一人に對する輸出の金額は、少ないに反して、亞爾然丁や、ローマニヤ、否ブルガリヤでさへも、是より遙に多いことである、これは、蓋し前の二國內には、多數の人口を有する廣い土地で、自家の需用に

供するに足るだけの穀物を、産せざる所があるからである、此等の土地では、穀物の國內貿易が、盛に行はれて居る、現に露國では、裸麥の國內貿易は、其の國外貿易より遙に盛である。北米に於ては、大西洋沿岸の北部諸州と、之に接する加奈陀地方とは、穀物を輸入する土地である、此の邊は、大市街の多い所で、又工業の盛なる所である。

ニウジーランドが、莫大の肉を輸出することや、二三の熱帶國が、多量の果物を、輸出することは、最も吾々の注意を惹くことである、熱帶國の果物とは、バインアツプル（鳳梨）と、バナナ、（香蕉）とが、殆ど其の全部を占めて居て、兩者とも、盛に、北米及び歐羅巴に輸出せらるゝのであるが、ジマイカ、キウバ、コスタリカ等の諸國の港灣にては特別の汽船が、之が運送に従事して居る位である。

人口一人に對する小麥産額の、最も大なる所は、合衆國の南北兩ダコタ州と之に接する加奈陀の部分である、北ダコタ州にては、其の額、實に四千六百キログラム（千二百二十三貫六百匁）に上つて居る、これは、土地が平坦で、到る處殆ど皆小麥畑ならざるはないと云ふ有様で、且斬新の收穫器械や、其の他、人力を省く、諸道具を用ゆるに、基くのである、是に因て、米人は、世界の穀物の産額を増加せしめ、同時に、米國の廣漠たる平野（ブレイリース）を、非常の速度を以て、耕地に、化せしめつゝあるのである、尙又、其の新發見の器械を以て、世界を、益したことも多大である、現に米人の發見した器械は、今は、露國の南部、カウカサスの北部、西伯利亞の西部等からエニセイ河地方まで使用せられ其の他、黒龍江地方、濠洲、及び南米ラブラタ河地方にも使用せられつゝあるのである、此の新器械の使用が、從來、人口稀疎の土地に、市街地や、工業地を、勃興せしめたばかりでなく、歐洲内

にても、之が恩澤を蒙つた所が、少くないのである。

次に述べたいのは、歐洲諸國より、世界の新開地に向つて流れ出した、移住民が、世界の人口の配布の工合に大影響を及ぼしたことである、之が爲に、歐羅巴の人口の増加は、新開地のそれに及ばざること遠く、且新開地の人口は、移住民の爲に、直接に急激の増加をなしたばかりなく、間接にも、亦大に増加の度を早めたと云ふのは、移住民中には、血氣盛んの増殖力の強い者が多いからである、歐羅巴から出る、移住民は、左の三種に別かるのである

(一) 農民　資本は少ないが、勞働には、充分慣れて居るものである、して、其の目的は、故郷に居て、小作人たらんよりは、外國に出で、獨立的生活を、營まんとするに在るのである、故郷にて、獨立的生活の出来ないのは、或は地面が高價で、小資本では、之を買ふことが、出来ないからでもあらうし、又宗教上の壓迫を受けて、其の自由を侵害せらるゝからでもあらうし、又他

國人の支配下に在つて、人權の伸暢が出来ないと云ふことにもあるのであらう、第十一世紀以來、露國の大半が、殖民せられたのも、斯かる種類の移住民に依つたので、最近四十年間に、カウカサス北部、及び西伯利亞の或る地方が殖民せられたのも、亦此種の移住民に依つたのである、又最初、合衆國の北東諸州（マサチウセツツ、ペンシルワニヤ等）の殖民せられたのも、此等の移住民によりてである。

(二) 都市人 此の種の移住者は、自ら働くことを厭はないものではあるが少くも、五千圓以上の資金を有するものである、彼等は、米國のブレイリー原野に至りて、廣大なる地面を求めて、之を麥畑にするとか、珈琲や茶を植ゆるとか、藍を植ゆるとか、又は羊を飼ふとか、大仕掛の農業を営むもので、斯かる移住民を出だす、本家と云ふべき國は、英吉利である、此の移住民は重に貴族や、富豪の、嫡子以外の子である、次男三男の、我が邦で、所謂冷

飯喰ひと稱ふる連中である、何故、此等の不自由なき身分の者が、移住者とまでなつて、外國に行くかと云ふに、親の財産の大部分を譲り受くるものは矢張嫡子である、且社會に出て、好位置を得るのには、矢張天才を要するのであるから、故國で小さくやつて居るより、寧ろ海外に出て、大飛躍を試みやうとの念を起すものが、彼等の中に、いくらも出て來るのである、此の種の移住者は、數に於ては、甚だ少ないに違ひないが、教育のあること、資本のあること、決心の堅いこと等に於ては、第一等で、經濟上より、見ても、極めて、大切の移住者である。

(三) 労働者 これは、勞銀が高いのを望んで、移住するもので大抵、旅費以外の金は持つて居ないものである、田舎から、市や工業地に、移住するものも、多くは、此の種のものである、又五十年來、歐洲諸國から、海外、殊に米國に移住するもの、多數も、此の種のものである、蓋し、今後は、此の

種のもものが、益々増加するであらうと思はる。

一昨年（明治三十八年）、合衆國に出掛けた移住民、一百万人の中で、全く新しい土地に行つて、自ら之を開墾した者は僅に五萬に足らない位で、又既墾地の労働者となつて行つたものも、是より少し多い位のものである、又既墾地を買ひ求めた者も、少しは、あつたのであるが、移住民の大多數、即ち五分の四は、大市街地や、炭山等に止まつたものである、して彼等の半数以上は、皆田舎から出て來たもので、あつたのである、然らば、何故に彼等は、地面の極めて安い、廣漠たる西部の沃野に行つて、此處に、新ホームを作らないのであらうかと云ふに、其の理由は、極めて、簡單である、即ち遠方の西部まで、行くには、旅費が不足である、よし、行くことだけは、出來ても、家財諸道具一切を整ふるには、少からぬ金を要する、かういふことである、之に反して、市街地や鑛山に居れば、仕事もあるし、又世話をする同胞も居

るのである、夫からスラーブ人、伊太利亞人、獨逸人等には、尙他に、一理由がある、それは、散住に慣れないことである、米國の西部に行けば、廣い土地を開墾するのであるから、住家と、住家との間が、非常に離れて居て、住家は、殆ど孤立して、居るやうなものである、然るに、前記の歐人は、古來部落的住居に慣れて、居るものであるから、孤立住は、彼等の甚だ嫌ふ所である、歐人で、此の孤立住を厭はぬものは、多く諾威人である、英人も、亦さうであるが、これは、寧都市人的移住民に屬すべきもので、大規模の耕地を設けて、大農たるものである、米國にて、全然新しい土地に入り込む卒先者は、矢張大抵、米國又は加奈陀出生の米人である、此等の人は、自ら開墾した土地が、高價に賣れる場合には、之を賣つて、更に安價の未墾地に入り込んで、再び此を開墾するのである。

明治三十五年から、三十八年までの、三箇年間に、合衆國に移住したものが、

約八十九萬二千人である、其の中で、英國人が、九萬五千人、スカンヂナビヤ人が、六萬六千人、獨逸人が、四萬二千人、奥匈人が、二十二萬人、伊太利亞人、二十一萬五千人、露國人が、十五萬五千人である、それで、此の三年間に、最多數の米國移住民を出したのは、奥匈國、伊國及び露國の三箇國である、其の以前には、最多數を占めたのは、獨逸人と、愛蘭人とであつた明治三十三年に行はれた、合衆國の人口調査には、外國出生者を、洲別と故國別としてある、是によると、愛蘭、伊太利亞及び露國に生れた者は、大市街や鑛山の多い、大西洋沿岸北部の諸州に入り込んで、其の多數は、勞働者であるが獨逸人と、瑞典人との、此等諸州、及び中央諸州に居るものも、殆ど之と同様である、諾威人は、大市街を避けて、多くブレイリー平野に移住し、自ら獨立のホームを拵へるに至るまでは、耕地の勞働者として、人に雇使されて居る。

第 五 表

種 類	口 數	分 布 (百 分 比 例)		
		北 大 西 洋 諸 州	中 央	小 麥 諸 州
獨 逸	二六六三〇〇〇	三六	三七	一四
愛 蘭	一六一五〇〇〇	六九	一六	四
英吉利蘇格蘭	一〇七三〇〇〇	五一	二一	八
英領加奈陀	七八五〇〇〇	三六	三一	一二
瑞 典	五七二〇〇〇	二二	二八	三五
伊 太 利 亞	四八四〇〇〇	七二	一〇	二
露 西 亞 (波蘭芬蘭除ク)	四二四〇〇〇	七一	一二	一二
佛領加奈陀	三九五〇〇〇	五五	一四	五
波 蘭 (露、奥、獨、三國、波蘭人)	三八三〇〇〇	四七	四一	四
諾 威	三三六〇〇〇	六	三〇	五五

明治三十三年には、外國出生者の、百分比例は左の如くであつた

全 合 衆 國

一四

北大西洋沿岸諸州

二二

(マサチウセツツ及ロードアラインドは、人口最も稠密、且工業最高の地で、其の比例は、三〇)

(ニウヨーク及ニウゼルジは、紐育市を算入して二五)

中央諸州

一六

小麦産出諸州

一八

(ミンネソツタは、二九、北グコタは、三五)

太平洋沿岸諸州

二三

南方諸州

二

(テキサスは六、クラホマは二)

以上は、多年の結果で、外國出生地中には、既に長く、合衆國に住んで居るものもある、最近十年乃至二十年間には、労働者の入國、最も多くして、之が爲に、市街地及び工業地の人口の、膨脹は、至つて急速であるが、之に反

して未墾地に、移住し來るものは、甚だ少ないのである、蓋し、現時合衆國內に、移住するもの、惹き起す現象は、昔し愛蘭人が、紐育市をして、世界最大の愛蘭人の都市となさしめたやうな、ものである、即ち、彼等は、主として、市街の人口を膨脹せしめつゝあるのである、紐育は、今では、又最大の猶太人市である、此の市に此の人種の多いことは、有名なるウォルソー府や、オデツサ府の上にあるのである、移住民の性質と、移住地との、變化、次ぎの事實に、現はれて居る。

千七百九十年來の、合衆國の人の調査にては、人口の中心なるものを算定して、之を地圖の上に、載せたのである、此の中心は、常に、北緯三十九度線の邊にあるものであるが、東より、西に向つては絶えず動いて居るものである、此の中心は、千七百九十年には、始ど西經七十六度の下、ボルチモール府の附近にあつたのであるが、千九百年(明治三十三年)には、十度ほど

西遷して、西經八十六度、インデヤナ州のコランバス府附近に變つたのである、大體より云ふときは、千八百六十年頃までの西遷は、年々急速で、千八百五十年から六十年までの十年間は、實に一度六分に及んだのであるが、其の後は、緩慢となつて、千八百九十年から、千九百年即ち明治二十三年から三十三年までの、十年間の西遷は、僅に零度五分、即ち、前の三分の一に、減じたのである、現今に在つて、西部に移住するものと、工業盛大の東部に移住するものとを比ぶるに、東部に移住するもの、方、漸次、優勢を呈しつつある有様である。

一昨年（明治三十八年）は、從來に比し、移住民の最も多く出た年であつたが、合衆國に入つたものが、百二萬七千人、加奈陀に入つたものが、十四萬六千人（明治三十四年には僅に四萬九千人）であつた、又一昨々年（明治三十七年）、亞爾然丁共和國では、入國したもの、出國したものに超過するこ

と、九萬七千人で、其の、明治三十三年から三十七年までの、一箇年の、平均数は、三萬七千人である、去る明治二十八年亞爾然丁國の調査によれば、同年、同國の外國出生者は總人口の二割二分を占めて居て、烏爾圭でも、明治三十三年に於ける其の数は、總人口の二割一分に當つて居たのである、又兩國の外國出生者中、五割四分は、伊太利亞人で、二割八分は、西班牙人であつたのであるから、その移住民の國籍は、合衆國（主として獨人と愛蘭人や、加奈陀濠洲（主として英人）と、全然異なるものである。

亞爾然丁の統計によると、千八百五十九年から、千九百四年（明治三十七年）までの間に、入國者の出國者に超ゆること、百九十二萬七千人で、此の数は現在の人口の三割三分に當るものである、是に因て觀るときは、ラブラタ河沿岸の諸國（亞爾然丁、烏爾圭等を云ふ）は、比較的、合衆國より、一層移住民の入り込む土地で、あることが分かる、但し此等が、合衆國に於けるが

如く、土地の住民に同化せらるゝや否やは、疑問である、何故なれば、現に國の經濟的勢力は、殆ど皆外國人の手中に在ると云ふ有様であるからである。此等の地方でも、米國發見の新器械は、盛に使用せられて居る然し移住民の原住民に對する數や性質が、全く異つて居る、即ち外國出生者が、主部を占めて、且小地主が、多いのである、又此の地主の生計は、至つて低くいに反して、勞銀は高いのである、して土地は、小農主義と、程度低き生活法を許すのであるから、小資本の者が、獨立的農業を營むことが出来るのである、随つて農民の移住に適するのみならず、現に農民が、移住しつゝあるのである。

濠洲は、西部を除き、十數年來、移住者の甚少ない所である西部は、之に反して、多量の砂金を産する所から、隨分移住者を吸収して居る、然し外國人の多數が、長く、此の地に止まるや否やは、疑問である。

北米及び濠洲の、新に殖民せられた土地では、一種著明の現象を呈して居る即ち、土地の人口稠密の度が、歐洲西部の、それに達せざるは勿論、露國や、スカンヂナビヤ中の最北の地の如き、人口甚だ稀薄の地の稠密の度位に達すれば、最早、此の地に入り込む、移住民はなくなつて、又前の移住民も、更に他へ再移住を始むるのである、故に、人口の増加は、出産數の、死亡數に超過する數の上に現はれたものより小となるのである、只さうでないのは、大市街地や、急速の進歩を呈する工業地ある所である、例へば第六表の如しである。

第 六 表

北 米	一方村の人口	十年間の増加(百人比例)
イリノイ州	三三三	二六
同(シカゴ市を除き)	二二二	一一
アイオワ州	一七七	一七

カンサス州

七

三

ネブラスカ州

五

七

濠洲

濠洲グキクトリヤ殖民地

五

五

タスマニヤ殖民地

二五

一六

イリノイ、アイオワの二州は、合衆國中、最も豊饒の土地である、即ち山もなければ荒蕪の地もなく、又沼澤もないのである、それにも拘らず、シカゴ市を除いた、イリノイ州の人口増加は、蓋し、出産数の、死亡數に超過する數（統計なし）よりも、小なるやうである、又アイオワ州と雖も、是より大なりとは、言ひ難いのである、カンサスと、ネブラスカとの東半は、甚だ豊饒の地で、雨量も充分であるが、西半は耕作よりも、寧ろ牧畜に適して居る方である、此の二州に於ては明治二十三年から、三十三年までの間に、北は、ダコタ州、南は、オクラホマ州に向つて、非常の再移住があつたのである、

前表に、ウキクトリヤと、タスマニヤのみを擧げて、他の濠洲殖民地を擧げなかつたのは、此の二地には、他の如くに廣い沙漠や、半沙漠がないからである、山は兩地共に、あるのであるが、多くもなければ、又高くもない、蓋し殖民に適しないのは、全面積の、僅に四分の一ぐらいに止るのであらう、それに、ウキクトリヤには、世界有數の大市街たるメルボルン府がある、然し、其の實際の人口増加は、佛國を除き歐洲の諸國に於けるよりは、小である、明治三十五年乃至三十七年に、入國者の出國者に超過した數は、僅に三萬五千人であつた。

歐洲から出る移住民の入込む諸國で、一種特別の位置を有つて居るのは、ブラジルである、明治三十六年の統計によれば、同國の人口一千六百萬中、伊太利亞出生者が、百五十萬葡萄牙出生者が、百萬、獨逸出生者が、二十五萬である、して十年以來は同國に移住する者殆ど皆無で、又外國人中、殊に獨

逸人に至つては、土地の人に同化せらるることなく、故國の言語と習慣とは其の儘、之を墨守するとのことである。

西伯利亞に於ては、十五六年前までは、移住者に、非常の困難が、あつたのである、その困難と云ふのは、測量が濟んで、直に移住民を容るるやうになつて居た土地が、甚だ少なかつたのである、それで、新移住民は大抵舊移住民の村落に入り込んで、其の附近の土地を買ひ求めて、之を耕すと云ふ工合になつたのである、其の結果地面の價が、年を逐ふて騰貴したのである、加之ならず故郷を去つて、移住に出掛けることが、官僚政治の爲に種々の困難を受けたのである。

西伯利亞鐵道が布設せられてから、移住と云ふことに、一大變化を來たしたのである、即ち政府が、南部西伯利亞の殖民を、一大急務と認めたので、早速、左の如く、移民の便利を計ることになつた。

一、殖民に適する土地の探検と測量とを實行すること

二、移民と、其の所持品との鐵道運賃は、特に低減すること

三、病者の爲、醫師及び看護人を以て移民的病院を設けること

四、官費を以て新移住地に、寺院と學校とを設けること

右に拘らず、西伯利亞移住者の數は、割合に少ないものであつた、即ちチエリヤビンスク驛（移民が汽車の乗り換をなす驛）にての計算によれば、移民の此處を通過したるものが左の如くであつた。

明治二十五年	約 三三〇〇〇人
同 二十六年	同 五三〇〇〇人
同 二十七年	同 五六〇〇〇人
同 二十八年	同 一〇二〇〇〇人
同 二十九年	同 一八六〇〇〇人
同 三十年	同 八一〇〇〇人

同 三十一年	同 一四四〇〇〇人
同 三十二年	同 一六三〇〇〇人
同 三十三年	同 一六五〇〇〇人
同 三十四年	同 八六〇〇〇人
同 三十五年	同 八〇〇〇〇人
同 三十六年	同 八四〇〇〇人
同 三十七年	同 三〇〇〇〇人

三十七年に、移住民の非常に少かつたのは、當時日露戦争の結果、汽車は、主として、軍隊輸送に使用せられたからである。明治二十七年から、三十六年までの間に、左の諸縣から出た移住民の、人口一萬に對する數は、左の通りである。

ボルタリ	五〇	チエルニコヅ	四九
ウキテブスク	三六	モヒレヅク	三五

ブルスク	三四	ベルリ	三〇
オレル	二八	タンボヅ	二一
ウキロチシ	二〇	ハルコフ及サマラ	一九

他の諸縣には、十三人以上出た所はない、是に因て觀るときは、西伯利亞移住民は、黒土地の北部、及び中部の一部分より出づるもので、東の方は、ウナルガ河までは達して居ないのである、此の地の外、明治三十二年以來は、白露西亞(昔し波蘭王國の一部であつた所)より、多數の移住民を出すことになつた。

さて、以上を、他國と比較する爲に、愛蘭諾威を取つて見るに、此の二國から、年々、米國に移住するものは、人口一萬に付き、百二十人餘の割合で、露國のボルタワ縣から出た最大數(前に掲げた數は、移民最多の年のもの)に三倍するのである、して前の諸縣の人口の、自然的増加は、一萬に付き、百五十、即ち一分五厘の割合であるから、西伯利亞移住の爲に、人口の減少し

た縣としては、一もないのである。

西伯利亞で、移住農民の入り込んだは、左の個所である

一、トボルスク縣(殊に其の南部の諸郡)

二、トムスク縣全部

三、エニセイスク縣の最北部、中部及び南部

四、アクモリンスク州(ステツプ多し)の一部

五、ツルガイ州(ステツプ多し)の一部

移住民の最多数を有せし諸州縣は、左の通り

トボルスク縣	明治二十九年	約 四一、〇〇〇人
トムスク縣亞爾泰	同 三十三年	同 五六、〇〇〇人
同 亞爾泰以外	同 二十九年	同 三一、〇〇〇人
エニセイスク縣	同 三十三年	同 二四、〇〇〇人
アクモリンスク州	同 二十九年	同 四三、〇〇〇人

明治三十七年の調査によれば、移民地として選定せられて測量を了り、且既に移民濟となつた反別は、左の如くである。

	測量濟	移民濟
トボルスク縣	一八二七、〇〇〇町歩	凡六割 (測量濟の地の)
トムスク縣(亞爾泰以外)	一八三七、〇〇〇同	凡五割八歩 (同)
エニセイスク縣	一六一六、〇〇〇同	凡三割 (同)
アクモリンスク州	二〇七八、〇〇〇同	凡六割六分 (同)
ツルガイ州	九七一、八〇〇同	凡八割四分 (同)
セミパラチンスク州	二三〇、九〇〇同	凡二割一分 (同)

是によつて、アクモリンスク及びツルガイの二州が、ステツプ地でありながら、最多数の移住民を吸収したことが分かる、これは蓋し、ステツプ州、森林地と違つて、耕地に變じ易いからである又セミパラチンスクが、ステツプ地でありながら、移住された土地の少ないのは、蓋し氣候の餘り乾燥なるに

よるのであらう、エニセイスク以東の移民数は、甚だ少ないのである、こゝに擧ぐるに、足らないのである。

移住民が、森林地を嫌ふのは、之を耕地にするの、容易ならざるに在るのであるが、近來の經驗によると樺の林地と、トネリコの林地とは、大抵は、土質が甚だ良く、移民地には、至極適して居ることが分つたのである、且つステツプ地ほどは、收穫が多くないかも知れぬが、然し又凶作も、遙に罕で、土中の養分も、ステツプより、長持がするとのことである

トボルスク、トムスク、エニセイスクの、三縣では、ミヌシンスク郡を除き、移民の落ち附いた土地は、主として、北緯五十五度と、五十八度との間に在りて、ミヌシンスク郡だけは、五十四度の附近に在る、ステツプ諸州では、獨りアクモリンスク郡にて、殆ど五十度邊まであるのみで、其の他の部分にては、皆五十二度と五十五度との間に在るのである。

以上と、比較の爲に、歐洲人が、移住する、新開墾の緯度を擧げて見やう

加奈陀のマニキバ及びサスカチワン二州

北緯四十九度乃至五十二度

合衆國部ブレイリー帯ミテソタ及び北ダコタ

同 四十四度乃至四十九度

兩方帶、北部テキサス、オタラホマ、印度人州

同 三十二度乃至三十六度半

亞爾然丁及び烏爾圭

南緯三十二度乃至四十度

是に因て、西伯利亞の移住地は、最北に位して、移住民の出た故郷の地より、多くは北方に在ることが明かである。

近來、歐羅巴人の説に下の如き言がある、今後滿洲の日清人に殖民せらるゝ速力は、未だ曾て、白人の殖民地に見ざる程の、急激のものであらう、戦後清國政府は、女子の移住を許容したので、清人の滿洲に入り込む數は、夥多いものである、又日本は、南滿鐵道線路に沿ふての移住者に對しては、非常の便宜を與へて居る、不幸にして、清國には、滿洲に移住した清人の數を知るに足る統計がない、又日本は、之を知つて居ても、列國の注意を惹くに氣

兼ねして、何事も秘密に附する疑がある、とかう言つて居る、是等のことは如何なるものか、よし滿洲の殖民が、實際前代未聞の速度を以て、進みつゝあるにもせよ、こは、東亞の平和を保つ上に於て、極めて必要のことで、吾々東洋人は勿論、世界の博愛的人種は皆舉つて、歓迎すべき事柄であると思はる。

科 學 雜 談

金華山沖の怪火

世の中には、色々の奇異なる火の現象があつて、其の火は、又色々の原因に由て起るものであるが、電氣作用に由て起る、セイント、エルモアの火と稱ふるものも、亦頗る奇異なるものである。

此の火は、螢光に似て、青白色を呈すること、最も多く、且風雨の際、物の

尖端より、出づるのを、常とするのである、例へば、陸上では、樹木の頭とか、海上では、船檣の先きとか、いふやうな處から、出づるのである。

昔し、羅馬時代に、其の驍名を、一世に轟した猛將シーザルが、或る夜、風雨を侵して、進軍した時、兵士の携へて居た投げ槍の先から、一齊に火が發したと云ふことが、記録に載つて居る、又同じ羅馬の著作家、プリニーも、夜中、城砦に番をして居た、兵士の槍端より、火の出たのを見たことがあると書いて居る。

西洋の海上では、地中海に、此の火が、屢現はるゝと云ふことである、航海者の言ふ所によると、此の火か、出づれば、天氣は、大抵霽るゝと云ふので、伊太利亞地方の船夫は、之を彼等の保護神たる、聖、エラスマスの出現に基くと云ふて居る、此の火をセイントエルモアの火と名付たのも、エラスマスの火と云ふことで、蓋しエルモアはエラスマスの畧である。

去る明治三十二年の夏、余は沖繩縣に行つたことがあるが、此の時、神戸から乗り込んだ船が、大阪商船會社の須磨丸で、其の船長が、大隅直次と云ふ、餘程學識ある人であつた、航海中は、徒然の餘り、時々、船長と、色々の話をしたのである、其序に、一度、余は、船長に向つて、世に、セイント、エルモアの火と稱へて、船上に現はるる、電火があると云ふことであるが、貴下は、之を目撃せられたことなきや、と尋ねた處、氏は、余が知人に、澁谷敏夫と云ふ、京都丸の一等運轉士を勤めて居る人がある、此の人が、お話の様な、火を見たこと云ふことがあるから、何れ、大阪に歸航したら、澁谷氏より、貴下に、其の報告を送らせることに致さんとの返答であつたが、其の後、其の報告は、余が手に届いたのである、して其の話は、年々地文學の講義の際に、余は生徒に、言つて聞せたのであるが、今こゝに、之を世に公にして、廣く、江湖の人にも知らせることにしたのである。

京都丸と云ふ、澁谷氏の、乗り組んで居た船は、當時、廣海仁三郎（大阪の人か）と云ふ人の所有であつて、登簿噸數、千六百六十五噸、總噸數二千六百八十七噸の英國製の鋼質船であつた、此の船が、明治二十九年、二月五日、藝州宇品港から、北海道の室蘭に向けて、航海する途次、同九日午後十一時頃、陸前の金華山を距る、凡三海里半の沖に差し掛つたのである、此日は、朝來、曇天で、風は南々東から吹いて、海上小波を見るのみであつたが、午後に至り、雪が降り始め、夜に入ると、益々大降りとなり、又四方暗黒にして、咫尺を辨ぜざる程であつたから、船も、速力を弱めて、徐行しつゝあつたのであるが、十一時十五分に至り、俄に、七個の鮮明青白色の卵形火が一時に、檣上に現はれたのである、即ち其の三個は、前檣の上端、并に其の下方、網の附着點、二個所に、一個は、前檣の下方より後方に向かへる檣桁の末端に他の三個は後檣の上端、及び其の下方、網の附着點、二個所に現はれたので

ある、尤も、此の七光中、後檣頭に在つたものは、既に初夜から薄光を放つて居たのであるが、他の六光が、現はるゝと同時に、大に鮮明となつたことである、尙又此の七光の外、右舷の、短艇を吊るす、ダビツトの先端にも、一個の小光が現はれたのである。

さて、此の光の現はれた時分は、非常の大雪降りて、甲板上は、積雪凡一尺に及び、又綱の上も、風上に當つて居る側は雪が積んで、其の太さ、平常の三倍に及んで居た位であつたから、光の出現と共に、これが雪に反射して、船上が、一時に白晝の如く明るくなつたのである、それで、船首を看守して居た水夫と、船橋にて、舵を操つて居た舵夫とは、驚愕の餘り倒れたとのである。

澁谷氏の報告によると、光の大きさは、十六燭光の電燈位と思はれたとある、又光は、同夜十一時五十分、降雪がやむと同時に後檣頭の一個を除い

て、皆消へ失せてしまつたが、後檣頭のもものは、薄光となつて、翌日午前四時まで見えて居たとの事である。

ダビツトの末端に現はれた光は、他に比し、餘程弱い光であつた爲に、船橋の左舷より見るの外は、他からは、見えなかつたのである、澁谷氏は、布屑を以て、光の出て居る、ダビツトの先きを摩擦して、置いて、左舷に行つて之を窺ひ見たるに、其の光、既に薄弱となり、且其の形を變へて居たとのことで、それから、氏は再び光の個所に行つて、之を、前の如く、布屑にて拭ふて見た所、今度は全く消へ失せたとの事である、それから、氏は、其の布屑を、綱に結び付け、二十尺ばかり、上の方に捲き揚げて見た所、其の布屑も、光を發して、恰も、夜中、螢を踏み潰した時の様に次第に、薄くなつて、消へてしまつたとのことである。

此の種の火で、加奈陀、ニウ、フランスウ井ツク州のシヤロール灣上に屢次、

現はるゝものがある、此の火は、其の形、多くは半球状をして、其の平な面を、水面の方に、向けて居るものであるが、時によれば、其の形、見る間に、伸長して、柱状に變ずることがある、して其のブル／＼震動して、多少舞踏的の運動を呈する所から、如何にも、幽靈的怪火の如くに、見ゆるのである。此の火は、遠方から見れば、燈臺船の火の如くにも見え、又柱状であるときは、船火事と誤認せらるゝこともある、何にせよ、風雨の前に現はるゝものであるから、セイント、エルモ一火に違ひないのである、但し、其の光力の強いことと、屢現はるゝこととに於ては、他に此類がないとの事である。

山登りの人體に及ぼす影響

毎年夏季に入る時は、湯治、避暑、遊山などに、出掛くる人が、多いのであるが、近年、交通機關が、發達した爲に、此の種の人が、以前に比べて、滅切、殖へて來たのである、随つて、汽車などの中も、餘程混雜するのを見て、

西洋人は、邦人を、旅行好きの人種と評して居る。

蓋し、邦人が旅行好きなることは、謂はゞ、先天的の性質であつて、此の性質は、邦人が花を愛したり、風景を愛したりする、所謂天然を愛する、一種の美術心を有つて居るからである、又此の美術心を養成したのは、全く、其の生れ故郷であつて、此の故郷が、世界の公園とまで稱せらるゝ程の、美國であるのである。

邦人は、單に旅行好きと云ふばかりでなく、又山登りが、好きである、殊に、富士山とか、御岳山とか、云ふやうな、高山登りが、大好きである、之が爲に、少し高い山さへあれば、必ず道が附けてある、而も其の上に、大抵神様が祭つてある、或は、山登りは、神様の爲にするのであると、言ふ人もあらうが、一部の人は無論さうであらう、然し多數の人は、謂はば面白半分に登るのである、若し、邦人が、元來山嫌であるならば、面白半分に登るやうな、

彌次馬連はない筈である。

さて、日本人は、山登りが好きで、年々山登りをするものが、澤山ある以上は、其の人體に及ぼす、影響ぐらいのことは、知つて居て貰いたいものである。山の空氣が市街地の空氣より、清淨であることは、誰も、知つて居る所であるが、それ以外に、まだ、大切なことがある、余は、元來地質學者であつて、殆ど三十年以來、山とは、深い關係を有つて居るのであるから、山と人體との關係を、書物に就いて調べて見たのである、すると、嘗て、ツンツ、レウキー、ミユラー、カスバリ諸氏のアルプス山中にて、研究したものがあつた、其の大意は左の通りである。

一、血液中の變化 海面を離れて、上に登れば登る程、血液中の赤血球が、増加する、ウ井アールと云ふ人は、山に登れば、一立方ミリメートル中の赤血球の數が、五百萬から一躍して七八百萬になると、言つたことがあるが、こゝ

は確ならずとしても、兎に角、數の増加は、事實である。

二、消化力の變化 精密なる研究によれば、海拔二千五百米(八千貳百五十尺)の高さまでの間なれば、消化力は、確に増進する、殊に四圍の氣溫が、低い場合に、さうである、若し氣溫が高ければ、消化力の増進は、明かでなく、登山の勞働が激烈なるときは、反て消化力を鈍くするの作用がある、又四千七百米(一萬五千四百十尺)の高さにての研究によれば、此の高さに於ての、消化力の増進は、極めて微々たるものである。

三、酸化作用の増進 吸入した酸素と、吐出した炭酸との量を、比較しての研究によれば、酸化作用は、僅に四百米(千二百二十尺)の高さにても、既に著しき増進を示すのであるから、登山の爲、筋肉を運動せしむれば、其増進は、一層大となる、故に高山に登れば、酸化作用は、頗る激烈となる。

四、窒素質物の需用の増加 如何なる動物でも、身體成長の時代には、身體

中に吸収する、蛋白質の如き、窒素質物の量は、體外に排泄せらるる窒素質物の量より、一層、多いのである、老成者に在ては、斯かることは、一定の場合にのみ、見るもので、他の場合には、吸収排泄、共に同量である、成長の際には、新細胞製造の爲に、窒素質物が、多量に入用である、老成者に於ては、腕とか、足とか、身體の一部分を、働かすれば、窒素質物の需用が多かつて、此の部分の筋肉だけが、太く發育するのである、但し一定の大きさに達すれば、それ以上には、發育しない、さうなると、窒素質物も、餘分に入らなくなるのである。

山登りの際には、窒素質物の需用が、多くなつて、吸収量の、排泄量より大なること、丁度成長時代に於けるが如くなるのである、此の事實は、海拔僅に四百六十米(千五百十八尺)の邊でも認めらるるので、登れば、登る程、一層著明となる、又山から、低地に降つて、暫らくの間は、矢張、山に居る時

と同じである、但し、之が爲に、體量は、殖へない、これは、蓋し、他方には、酸化作用が激しくなつて、非窒素質物の消耗を、來たすからであらう。餘り高い山になると、吸収排泄、兩者の差が、不明となる、これは、多分眩暈等にて、消化力を害するからであらう。

五、呼吸と血液の循環との變化 海面を去つて、高所に登れば、登る程、空氣中に在る酸素の量が、減るのであるから、之が爲に、肺臓の刺戟せらるること、恰も空氣中に、多量の炭酸ある時と同様である、然るに海拔三千米(九千九百尺)を越ゆれば、肺の刺戟は減じて、其の働きは、鈍くなる、故に、其の働き工合は、丁度、低地に於ける重病者に見るが如くなる。

血液の循環に至つては、中位の山なれば、活潑になる、これは、酸素の少ない空氣中より、可成多量の酸素を取らんが爲に、呼吸が急速になつて、心臟の働きが昂進するからである、然るに、餘り高い山になると、心臟の働は、

反つて鈍くなる、これは、多分、酸素に乏しき血が、心臓の筋肉の働きを、鈍くするからに違ひない。

以上述べたことを、一括すれば、かうである、即ち中位の山、即ち高さ凡二千四五百米（八千尺位）までの山にては、赤血球の製造が、盛になつて、身體中に在る、無用物の排除が、促され、肺臓心臓の働きも、良くなつて、血液の循環が盛になり、消化力が、増進して、窒素質物の需用は、恰も若年時代の、成長期の如くなる、故に身體の健康は、益良くなるのである、又多くの病者に取りても、高さ千七百乃至二千米（五千六百尺乃至六千六百尺）の山間滞在は、黴菌に對する抵抗力を強くして、精神又は身體の疾患の治癒を、速かならしむるの功能がある。

右の次第であるから、夏季休業を利用して、山登り、山歩き、山間滞在をすることは、身體の健康を増す、最も愉快な一便法である。

鳴 響 山

墨其哥國、ソノラ州、ヘルモシロ市の西に方り、南北に走れる、一條の道路あり、カルメル街道と稱す、蓋し其の南端に、カルメルと呼べる寺院あるを以てなり、街道と市との間には、街道に接して、直に山あり、岩石より成りて、四圍の平野を抜くこと、凡二百メートル、岩石は、皆燒岩の類なるを以て觀れば、山は、火山的破裂に成れる、一の塊火山たるを知るべし、全山、殆ど草木なく、唯僅に、岩石の裂罅にて、少許の風化土を蓄ふるに、處々矮小の灌木と、禾木とを見るのみ、山頂は、洞窟、裂罅、凹處等に富み、其の間は尖銳の岩塊、屹立せり。

附近の人民は、山を呼ぶに、エル、ロセ、デ、ラス、カンバナスの稱を以てす、蓋し鐘聲の意なり、而して、此の山に此の名を附したる所以は、時に、山内より、一種の鳴響を發するに由る、此の鳴響たるや、風の方向強弱によ

り、其の高低を異にして、或は遠鐘の如く、或は洋琴の如く、或は、風弱きときは、低聲の笛の如し、而して風全く静なる時は、また聲を聞くことなし。鳴響の原因に至ては、未だ、之を窮めたるものなし、蓋し、山に登るは、難事に非ずと雖も、其の各方面に散在する、洞窟裂罅等、苟も、鳴響を發する疑の存する處を、盡く探究するは、決して容易の業にあらず、殊に、夏季に際し、暑氣強き時に然りとす。

土人の傳ふる所によれば、昔し、山上にて、横死を遂げたる者あり、蓋し其の聲ならんと、然れども、此の説の取るに足らざるは、復喋々を要せざるなり、一説に、洞窟若くは裂罅の口に當り、天然の笛に擬すべき、多孔の石ありて風の方向強弱に依り、自ら聲を發するものにはあらずやと、其れ、或は然らん。

天文學叢話

大尾

明治四十一年五月十八日印刷
 明治四十一年四月四日發行

學藝叢書	定價
六冊	前金 金貳圓貳拾錢
	外二郵税金參拾六錢
三冊	前金 金四圓貳拾錢
	外二郵税金七拾貳錢

編者 木村定次郎

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 市川七作

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

天文學叢話與付

著作權所有

定價金四拾錢

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

學藝叢書

洋裝菊判頗美本
紙數各二百五十頁
每編寫真版口繪及
密畫數十個挿入

▲正價 一册金四拾錢 ●六册前金貳圓廿錢 ●拾貳册前金四圓廿錢
▲郵稅 一册金六錢 ●六册金參拾六錢 ●十二册金七拾貳錢

編一第 理學博士 坪井正五郎君著
●人類學叢話

廣く人類を見よ。人類の別と云ふ。諸民族の相互の系統的關係を考へ定むる法。諸人類の比較的價値。野蠻未開人類の智慧。事物變遷の研究に對する人類學的方法。玉を好む風。玉飾の起源。進歩に添へる「のし」の變遷。土俗器と古器物。古墳調査。如何なる點に於て人類學を益するか。石器時代遺跡調査は人類學上如何なる利益ありや外數十項

編二第 理學博士 三好 學君著
●植物學叢話

植物と美術(緒言、美術寫眞齒、美術的標本畫、植物畫の練習、植物圖案) ●天然紀念物保存の必要並に其保存に就て(本論の主意並に天然紀念物の意義、天然紀念物滅滅の原因、世界各國に於ける植物保存の計畫並に其絶滅の危險、外國に於ける固有植物並に其絶滅の危險、我國に於ける植物の保存の計畫並に其實例其他數十項

編三第 理學博士 岡村金太郎君著
●水産叢話

本邦養魚沿革 ●海外養魚沿革 ●海中に於ける窒素の淵源 ●鮪の性質と飼育 ●水産學の範圍 ●海苔藻 ●藻と日比谷公園 ●神馬藻と昆布 ●寒天の用途 ●寒天の製法 ●ところてんと寒天歷史 ●テングサの採集 ●過度に道氣したる水の魚類に及ぼす影響 ●魚類分布の一斑

編四第 理學博士 石川千代松君著
●動物學叢話

進化論 ●精蟲の話 ●生物の生活は自愛か他愛か ●動物の子守 ●動物卵の大小及數 ●遺傳は父から多く來るか母から多く來るか ●蟹の夫婦 ●昆蟲の戀態 ●露の刺客 ●關係ある動物 ●鯨魚の話 ●蠅の話 ●サルの就ての學問 ●魚類と機中 ●獅子の話 ●目の話 ●龍と云ふ名に關係ある動物 ●外數項

編五第 文學博士 箕作元八君講述
●歴史叢話

國の發展と海軍との關係 ●歷史上より見たる道德の危機 ●西洋に於ける封建制度と武士道との起源沿革 ●國民將來の覺悟 ●日露戦争の史的意義と國民將來の理想 ●ナポレオン一夕話 ●古代文房具 ●四千年前の玩具 ●子ルソンの青年時代 ●ア・サー・王物語 ●少年と歷史

編六第 理學博士 松村任三君講述
●植物雜話

一物を學術的に既へ ●我國の園藝と公園 ●紅雪 ●雷 ●碎太の植物 ●水仙の話 ●蠟梅の話 ●紅葉 ●薺の話 ●百合の種類 ●木芙蓉の種類 ●秋の野の草 ●日本の園藝 ●初ての植物採集 ●事大主義を免れざる國語 ●附録 花菖蒲 ●顯微鏡の話 ●少年と植物

編七第 文學博士 上田萬年君講述
●國語學叢話

二十世紀に於ける國語の地位 ●桓武帝の話 ●演劇上の言語 ●戯曲に現はれたる武士道と大和魂 ●現今の作文教授法に就て ●子の好める人物 ●内地雜居後に於ける語學問題 ●教育上の雜觀 ●清國の留學生に就て ●教科書國定の困難 ●中山博士の薨去 ●六百年前のシリヤの笑府 ●附録 武者修業物語 ●獨逸學生々活

第九編 ●地理學叢話 理學博士 神保小虎君著

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座第二百四十番

博文館

理學士 一戸直藏君著

高等天文學

全一冊洋裝大判紙數三百廿四頁
 正價金四拾錢 郵稅八錢
 特製正價金五拾五錢小包料金八錢

天文學は吾等が日常目撃する太陽、太陰、惑星、衛星、彗星、流星、恒星等の天體に就て研究する一科學にして其範圍極て廣し、故に之を研究するに近時數種の部分を立てり、本書は彙に出版せし須藤學士の星學を讀みたる後更に進て斯學の奧義を研究せんとする人の資料に供する爲是等の分類を追はず、自然的方法により漸次天體に關する事項を記載し且つ説明せり、而して第一、是等天體の視運動及び實運動に關する法則を究め更に運動を起す原因を、第二、是等天體の形狀大小質量等を測定し、第三、是等の理學的性質及成分等を研究し、第四是等天體間の關係を講究する等實に遺漏なく説明せられたるものなり。

目次

- 緒言 ● 第一章、星の日週運動及坐標 ● 第二章、球面三角法 ● 第三章、坐標間の關係 ● 第四章、地球の形狀及大さ ● 第五章、視差 ● 第六章、濃氣差 ● 第七章、天球の視半徑 ● 第八章、太陽の黃道運動 ● 第九章、太陽の楕圓運動 ● 第十章、地球の運動及之に伴ふ諸現象 ● 第十一章、時 ● 第十二章、惑星(其一) ● 第十三章、惑星(其二) ● 第十四章、月 ● 第十五章、太陽 ● 第十六章、食 ● 第十七章、萬有引力 ● 第十八章、歲差及章動 ● 第十九章、光行差及年通視差 ● 第二十章、太陽の距離 ● 第二十一章、天體曆 ● 第二十二章、時の測定法 ● 第二十三章、緯度の測定法 ● 第二十四章、經度の測定法 ● 第二十五章、方位角の測定法

館文博 町本京東 元兌發

農學博士 稻垣乙丙君著

農藝氣象學

全一冊洋裝上製大判五四〇頁
 正價壹圓五拾錢小包料金拾貳錢

氣象學は實に人生に緊要なる一科學にして何種の業務に従ふも之れが大要を學ばざるべからず、然し農業は其家畜作物の生産に於て甚しく天然の支配を受くるものにして即ち太陽の光熱、空氣の成分、降水、風等の氣象要素の單獨若くは綜合より及ぼすの制裁を受け素の強弱は土地の勞力と資本との三者に待てり、然るに土地の要素中には土壤の外に天候の主なるものは天然よりなるものに於て、然るに土地の要素の中には土壤の外に天候の主なるものは天然よりなるものに於て、大強盛にして其關係する所は此點より觀ても甚だ重要なりといふべきなり稻垣博士學を研究し此天地を利用して農業生産に遺算なからず、須らく此重要の科學を學習せざるべ

農學博士 稻垣乙丙君著

農學氣象學教科書

全一冊洋裝上製大判一五〇頁正價六拾錢小包料八錢

第一章、緒論 ● 第二章、温度 ● 第三章、湿度 ● 第四章、風 ● 第五章、降水 ● 第六章、雲 ● 第七章、天候 ● 第八章、日本氣候 ● 第九章、日本氣候 ● 第十章、日本氣候 ● 第十一章、日本氣候 ● 第十二章、日本氣候 ● 第十三章、日本氣候 ● 第十四章、日本氣候 ● 第十五章、日本氣候 ● 第十六章、日本氣候 ● 第十七章、日本氣候 ● 第十八章、日本氣候 ● 第十九章、日本氣候 ● 第二十章、日本氣候 ● 第二十一章、日本氣候 ● 第二十二章、日本氣候 ● 第二十三章、日本氣候 ● 第二十四章、日本氣候 ● 第二十五章、日本氣候 ● 第二十六章、日本氣候 ● 第二十七章、日本氣候 ● 第二十八章、日本氣候 ● 第二十九章、日本氣候 ● 第三十章、日本氣候 ● 第三十一章、日本氣候 ● 第三十二章、日本氣候 ● 第三十三章、日本氣候 ● 第三十四章、日本氣候 ● 第三十五章、日本氣候 ● 第三十六章、日本氣候 ● 第三十七章、日本氣候 ● 第三十八章、日本氣候 ● 第三十九章、日本氣候 ● 第四十章、日本氣候 ● 第四十一章、日本氣候 ● 第四十二章、日本氣候 ● 第四十三章、日本氣候 ● 第四十四章、日本氣候 ● 第四十五章、日本氣候 ● 第四十六章、日本氣候 ● 第四十七章、日本氣候 ● 第四十八章、日本氣候 ● 第四十九章、日本氣候 ● 第五十章、日本氣候 ● 第五十一章、日本氣候 ● 第五十二章、日本氣候 ● 第五十三章、日本氣候 ● 第五十四章、日本氣候 ● 第五十五章、日本氣候 ● 第五十六章、日本氣候 ● 第五十七章、日本氣候 ● 第五十八章、日本氣候 ● 第五十九章、日本氣候 ● 第六十章、日本氣候 ● 第六十一章、日本氣候 ● 第六十二章、日本氣候 ● 第六十三章、日本氣候 ● 第六十四章、日本氣候 ● 第六十五章、日本氣候 ● 第六十六章、日本氣候 ● 第六十七章、日本氣候 ● 第六十八章、日本氣候 ● 第六十九章、日本氣候 ● 第七十章、日本氣候 ● 第七十一章、日本氣候 ● 第七十二章、日本氣候 ● 第七十三章、日本氣候 ● 第七十四章、日本氣候 ● 第七十五章、日本氣候 ● 第七十六章、日本氣候 ● 第七十七章、日本氣候 ● 第七十八章、日本氣候 ● 第七十九章、日本氣候 ● 第八十章、日本氣候 ● 第八十一章、日本氣候 ● 第八十二章、日本氣候 ● 第八十三章、日本氣候 ● 第八十四章、日本氣候 ● 第八十五章、日本氣候 ● 第八十六章、日本氣候 ● 第八十七章、日本氣候 ● 第八十八章、日本氣候 ● 第八十九章、日本氣候 ● 第九十章、日本氣候 ● 第九十一章、日本氣候 ● 第九十二章、日本氣候 ● 第九十三章、日本氣候 ● 第九十四章、日本氣候 ● 第九十五章、日本氣候 ● 第九十六章、日本氣候 ● 第九十七章、日本氣候 ● 第九十八章、日本氣候 ● 第九十九章、日本氣候 ● 第一百章、日本氣候

近世氣象學

全一冊洋裝大判三三八頁
 正價四拾錢 郵稅八錢
 洋布特製正價五拾五錢小包料八錢

館文博 目丁三町本區橋本市京東 元兌發

東京高等師範學校教授 後藤收太先生校閱
岐阜縣師範學校教諭 時田宗次君著述

中等教育 新撰物理學楷梯

▲全一冊洋裝中判三八八頁
▲正價五拾錢 郵稅八錢

近來物理學書の世に公せらるゝもの漸く多
きを加へたるは斯學の爲め誠と多幸と謂ふべ
し、然れども其多くは教科用書として初歩の
學生の参考書たるべし、物理の學習に苦み引きて一
般人士の理化思想に乏しき所以たるを信す、
著者は此缺點を補はんが爲に本書を著し普く
學生諸子の座右の友たらしめんことを期せり
故に本書は事實を基として説明を起し文章を
平易にして理解を資け、材料の多きを貴ば
す、網羅することゝ勉めたり且つ理論を挿用
すべき實例及び簡易なる實驗の方法を挿用
す、之を説明せり加ふるに後藤先生の精密なる
し訂を経たるを以て錦上添花の觀あるを知るべ

藤野修吉君 共編
藤野七三郎君
草野堅藏君

通俗理化一斑

▲全一冊洋裝大判三三〇頁
▲正價金參拾錢 郵稅八錢

理化學の學ばざるべからざるや論なし然れど
も從來通俗的に何人にも一讀其一斑を會得せ
しむるの良書なきは斯界の遺憾とする所なり
本書は理科大學にありて多年斯道に熱心研究
せらるゝ藤野、花井、草野三氏の著にして一
々實例を示して其理を明にし而かも所説懇到
繁に流れず簡に失せず一讀理科學の一斑に通
せしむ且つ髓頭には古今著名なる理化學者の
小傳を載せたるを以て偉人の性行逸歴及び斯
學發達の順序をも併せ知るを得べし、此れ近
來得易からざるの好著なり。

理學士 須藤治郎君著

星學

星學は最も趣味あり、且つ高尙なる學科なり、
其學の未だ平易に適合し、一般人士の著書
なる著者の天賦の才に、我々の學問に、
てる世人の欠點は、大に我々の學問に、
せざるは、大に我々の學問に、
界の或る大に我々の學問に、
ら、大に我々の學問に、
藤理學士が多年の學問に、
學にありて、大に我々の學問に、
專攻するの餘暇、大に我々の學問に、
之を鑑み、大に我々の學問に、
を鑑み、大に我々の學問に、
れ、大に我々の學問に、
挿入するの餘暇、大に我々の學問に、
て、大に我々の學問に、
に通せしむべし、大に我々の學問に、

目次

第一編 緒論	第一章 天體と地球の關係	第二章 地球の運動	第三章 太陽系の構造	第四章 太陽系内の惑星(水星金星)	第五章 地球の運動	第六章 木星	第七章 土星及其系統	第八章 天王星及其系統	第九章 海王星	第十章 彗星	第十一章 流星	第十二章 彗星	第十三章 彗星	第十四章 彗星	第十五章 彗星	第十六章 彗星	第十七章 彗星	第十八章 彗星	第十九章 彗星	第二十章 彗星	第二十一章 彗星	第二十二章 彗星	第二十三章 彗星	第二十四章 彗星	第二十五章 彗星	第二十六章 彗星	第二十七章 彗星	第二十八章 彗星	第二十九章 彗星	第三十章 彗星
--------	--------------	-----------	------------	-------------------	-----------	--------	------------	-------------	---------	--------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------

東京市本區橋本三丁目 元兌發 館文博

東京市本區橋本三丁目 元兌發 館文博

木村小舟君著

新撰 地天文問答

▲全一冊

洋裝上製小判二二六頁

正價貳拾錢 郵稅四錢

天體の現家地球表面に起る作用を一々簡明なる問題を設け受験者の便に供せん爲に一々其要所を掲記したれば諸學校入學試験に應せんとする人此書を机上に備へなほ活潑なる書冊に頭腦を痛めて而も要領を得ざるに反し利する所必ず多きものあらん乞ふ購讀を賜へ。

理學士 福井政一君著

普通物理學

全一冊

▲洋裝大判六三〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

▲洋布特製 壹冊 五拾五錢 小包料八錢

物理學は科學の主腦を制するものにして、其智識は一部専門家の間に得らるゝを以て足れりとせず、社會一般を通じて必須の學問なれば特に普通にして高等なる學理を説明せる書籍の存在するは單に學問の爲のみならず、人類生活の需用に値すること實に多大なり、本書は故郷山理學士の稿によりて更に福井理學士の増補訂正を加へて之を統一し博く普通物理學の新智識新材料を世の研究者に頒つ説述懇到挿圖數百蓋し物理學書の精冊といふべし。

寺崎留吉君編

新撰物理學問答

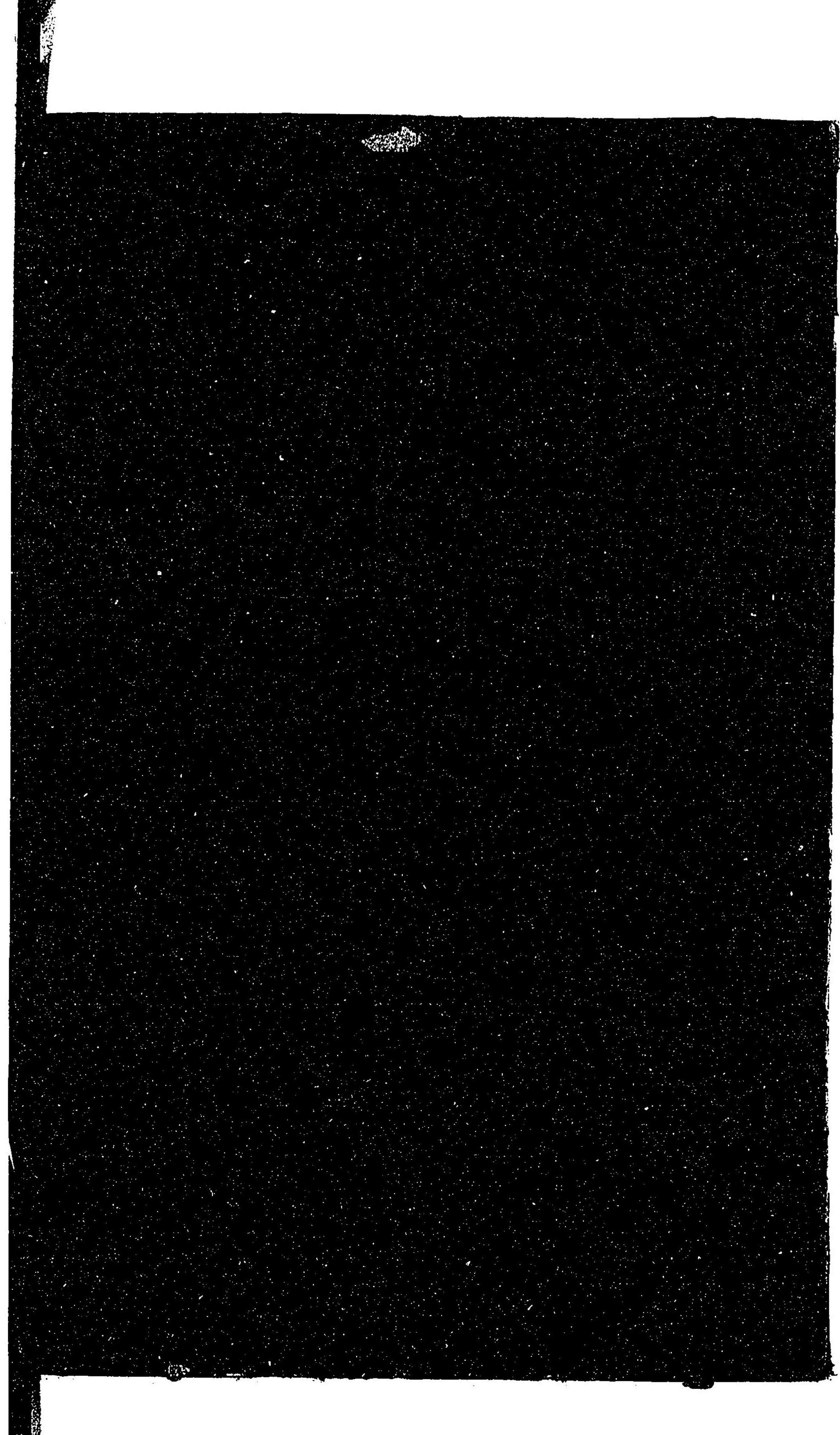
全一冊

▲洋裝小判二〇二頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

近來物理を簡單に説明せる書、梓に上るもの汗牛充棟も習ならずと雖、學者の考參に資するに止り未以て諸官立學校の入學試験に應ずべき準備用のもの少し此書は實に之か缺陥を補ふが爲に刊行せるもの、受験者の指南車なり。

發兌元 東京市本區橋本町三丁目 博文館

78
80



78
80

056201-000-9

78-80

天文学叢話

横山 又次郎 / 著

M41

CAK-0090

